

## 9. 数万年前に日本列島にたどり着いた新人はどんな暮らしをはじめたか？

私たち日本人のルーツは約 20 万年前にアフリカで誕生したホモ・サピエンシス・サピエンシス(Homo sapiens sapiens)で約 7 万年前にアフリカから長い距離、時間をかけて日本列島にたどり着きました。考古学的知見によれば、遺跡に約 3 万 8000 年前あたりに、最初の新人がたどり着いたらしいとされています。いわゆる後期旧石器時代ということになります。最初の人口は 1 万人程度といわれていており、狩猟採取民であったわけですが、定住することなく移動をしながら季節的な動植物資源を利用していたものといわれています。暮らしの基本は食・水、住、安全ということですが、どのようにして、どのような箇所を選択したのでしょうか。おそらく先の条件を満足するようなところで、これまでの経験知や暗黙知を駆使して、暮らし始めたものと考えられます。そうすると、まずは台地や段丘の裾部あたりではないかと思われれます。このようなところは背後に森林があり、前は開かれた沖積平野が見えるということになります。長い間には自然災害も経験しながら、学習を重ねつつ、利便性がよいところや石器になる石材の確保ということで行動範囲を広げていったのではないかと想像されます。この時期は、堅牢な住居などは構築しませんし、大きな集団ではなかったし、資源を貯蔵するということもなかったわけで、ベースキャンプ的な生活環境だったような気がします。

道具も発達していない草創期は、できるだけ自然を活用する、たとえば沖積平野の湿地を利用してシカなどを追い詰めて捕まえるような知恵を働かしていた可能性があります。そういう意味でも、先述の台地や段丘の裾部は地形を利用した生活環境としては良かったような気がします。そして、徐々に適応戦略として、捕獲するための落とし穴、石器製作、炉付きの住居、皮による防寒着、調理技術などが開発されていきます。この中で特に大きな変化を生むのが石器の素材となる石材資源の開発です。石材になるのは、黒曜石、ち密なガラス質の安山岩、頁岩や粘板岩、流紋岩などで、品質は別にしても、わが国の地質構成からいって比較的近場で得られるものもあります。

この後期石器時代の草創期は、地形や地質が暮らしの環境を支配するものであったことは明白で、これは植生や水源となども関連していることから、最初の新人が日本列島にたどり着いた時には、台地や段丘といった地形に注目してスタートしたと思われれます。その中で水害や土砂災害、火山噴火、地震などには恐れを感じていたと思われ、身軽に移動できる中で、長期間暮らせるようなところを選択していったような気がします。地形の特性を把握しつつ、自然現象に鋭く反応する感性が長い旅で受け継がれてきたのではないかと思います。